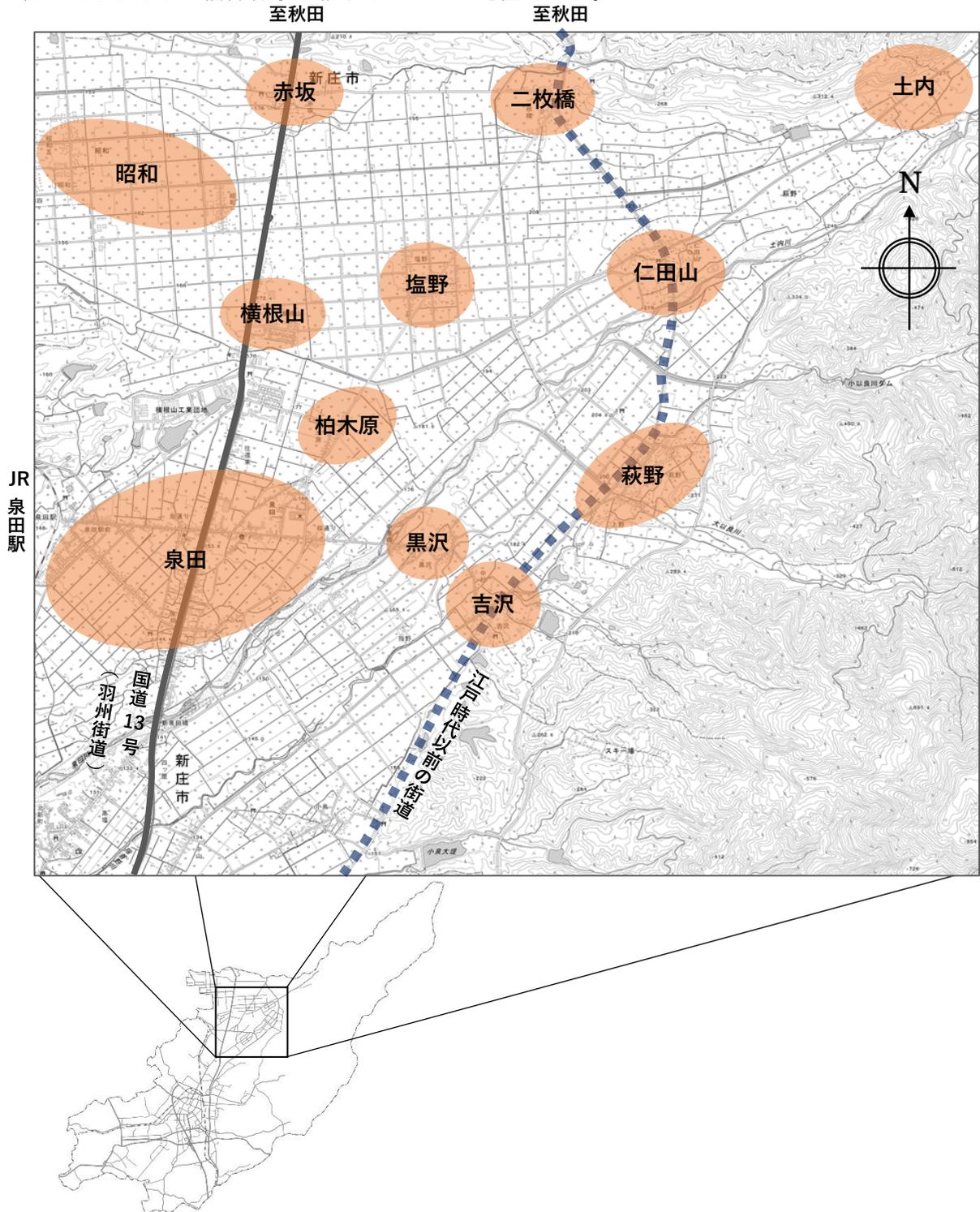


(4) 萩野地区の信仰行事に見る歴史的風致

1) はじめに

市の北部に位置する萩野地区は、旧萩野村にあたり、昭和30年(1955)に新庄市と合併した地区である。中でも、東側に位置する萩野・仁田山・吉沢・二枚橋などの集落は、^{はぎの}神室連峰の山々の麓に位置し、^に羽州街道が整備される以前の街道沿いの村々を中心に^{よしがわ}繁栄した農村集落である。そのため、^に藩政時代以前からの農村文化や山岳信仰が人々の生活に溶け込み、現在までさまざまな信仰行事が継承されている地区である。



萩野地区の集落位置図

2) 萩野・仁田山鹿子踊

① 建造物

◆ 宝積寺

萩野集落にある石動山宝積寺(曹洞宗)は、『山形県の寺院-内陸版』(昭和52年発行)によると、天正元年(1573)の創立とされ、萩野集落を治めていた楯主安食丹波守が開山したと伝えられている。萩野集落は、中世に片平楯の山麓に形成された小規模な城下集落で、西端の宝積寺、東端に宝蔵寺(現在は廃寺)、中央に清光院(修験道の寺院)を配して、集落の固めとしていた。

本堂は、建立以来大小の修復を繰り返した記録(札)が本堂内に残されている。本尊堂は宮殿(厨子)で、高さ4尺5寸(約1.36m)あり、天保12年(1841)に京都の木仏師によって作られたものであると記されている。

宝積寺の祭日(9月23日)には集落の夏祭りが行われ、この日に合わせて集落内で萩野鹿子踊が行われる。



宝積寺 本堂

真壁や襖を改修した記録
(昭和39年)

◆ 地蔵堂(地蔵尊)

仁田山集落にある地蔵堂は、村の鎮守として拝している地蔵尊を祀ったお堂であり、『新庄領村鑑(宝暦年間(1751~64年)編さん)』の萩野村の堂社の一覧に列記されていることから、宝暦年間以前に建立されたものであることが分かる。切り妻の屋根を持ったごく簡素なお堂であり、古くから地域住民の手で繰り返し修理・改修を行いながら維持されている。現在の地蔵堂の建築年を確認する棟札などの史料は残っていないが、昭和45年(1970)ころの写真に、現在と同じ建物が記録されている。

地蔵尊は、高さ70cmほどの木造の立像であり、御顔は白く化粧した美しい姿をしている。この地蔵尊は、村人に火災の発生を知らせたとか、洪水のとき身代わりとなって村を救ったなどの霊験譚を伝わっており、村人の心の拠りどころとなっている。

仁田山鹿子踊は、最初に地蔵堂境内で仁田山鹿子踊を踊る習慣があり、8月15日の例大祭は集落最大の祭りである。



昭和45年ころの地蔵堂



令和3年の地蔵堂



地蔵尊

②活動

◆鹿子踊の概要

この鹿子踊は、萩野及び仁田山の両集落に伝わる同一系統の一人立ち、7人組の鹿子踊である。鹿子踊は「作踊り」ともいい、市内で踊る回数が多い年は豊作になるといわれ、この踊りは五穀成就を祈る踊りであるとされている。

頭にかぶる^{かしら}頭はカモシカを模したもので、これは全国的にも珍しく、大きな特色といわれている。本県内には、各地方に数多くの鹿子踊（獅子踊）があるが、萩野・仁田山鹿子踊は、その中でも特色ある優れた鹿子踊として、昭和41年（1966）に県の無形民俗文化財に指定されている。また、昭和51年（1976）に「萩野・仁田山の鹿子踊」の名称で国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択された。



萩野鹿子踊



仁田山鹿子踊

◆萩野・仁田山鹿子踊の歴史

この鹿子踊の起源については、昔、村人が小倉山^{おぐらやま}に遊びたわむれるカモシカの群を見て、その面白さにひかれ、これを真似て踊ったのが始まりとする説や、奈良時代、大野東人^{おおののあずまひと}將軍の東征の折、助十郎というマタギの首領が兵士を慰めるためにカモシカの頭骨をかぶり、クマの毛皮を着て踊ったのが始まりとする説があるが、いずれも伝説のひとつにすぎず、確かなことは分からない。

県内の鹿子踊（獅子踊）に関する最も古い記録とされているのが『新庄^{しんじょう}古老^{ころう}覚書^{おぼえがき}』（享保13～14年、新庄藩士田口五左衛門が著した歴史随筆）であり、このなかに、戦国末から江戸時代初期の山形城主最上義光^{もがみよしあき}時代、山形城下に行って踊っていたことが記されている。

「古老の物語に、古最上義光の時代に、七月盆には獅子踊有之候由、方々より寄集り、人数三百人にて踊致候故、太鼓を打揃ると言事もなく、只どろどろと埒もなく、踊候事の由、此踊を踊候寺、山形にても三ヶ寺ならで無御座候由、右三百人の内、新庄より三十人役に當り出候由、此三十人計長幕にて、外は皆乳たれの幕にて有之候由」

当時は、新庄城下やその周辺の村々にも幾つかの鹿子踊があったようであるが、今日まで伝えられ、踊られているのは萩野鹿子踊と仁田山鹿子踊の2組だけである。

鹿子踊が踊られる期日は、萩野鹿子踊は、村の寺院・宝積寺の祭日に合わせた集落の夏祭りの日（9月23日）、仁田山鹿子踊は、村の鎮守・地蔵尊の祭日に合わせた集落の夏祭りの日（8月15日）となっている。また、両集落ともに、新庄まつりの最後の日（8月26日）の午前に戸沢神社及び護国神社境内で鹿子踊を奉納し、午後からは街中でも披露している。

以前は、このほか方々の場所で踊っていて、藩政時代は、旧暦7月15日、藩主の常葉町別邸とまわちように参って、君侯以下家老・係役人、藩主一門の家族、庶民に踊りを披露する鹿子踊庭入と称する行事が行われていた。また、藩主の菩提寺をはじめ城下の諸寺院、さらに招きによって町屋の庭でも踊ったという。新庄まつりの最後の日に鹿子踊が行われるのは、この鹿子踊庭入の風習を継承したものといわれている。

鹿子踊が、いつころから新庄まつりの最後の日に踊られるようになったのかは定かではないが、明治31年(1898)には北本町で鹿子踊が踊られた記録写真が残っている。



新庄まつり／北本町(明治31年)



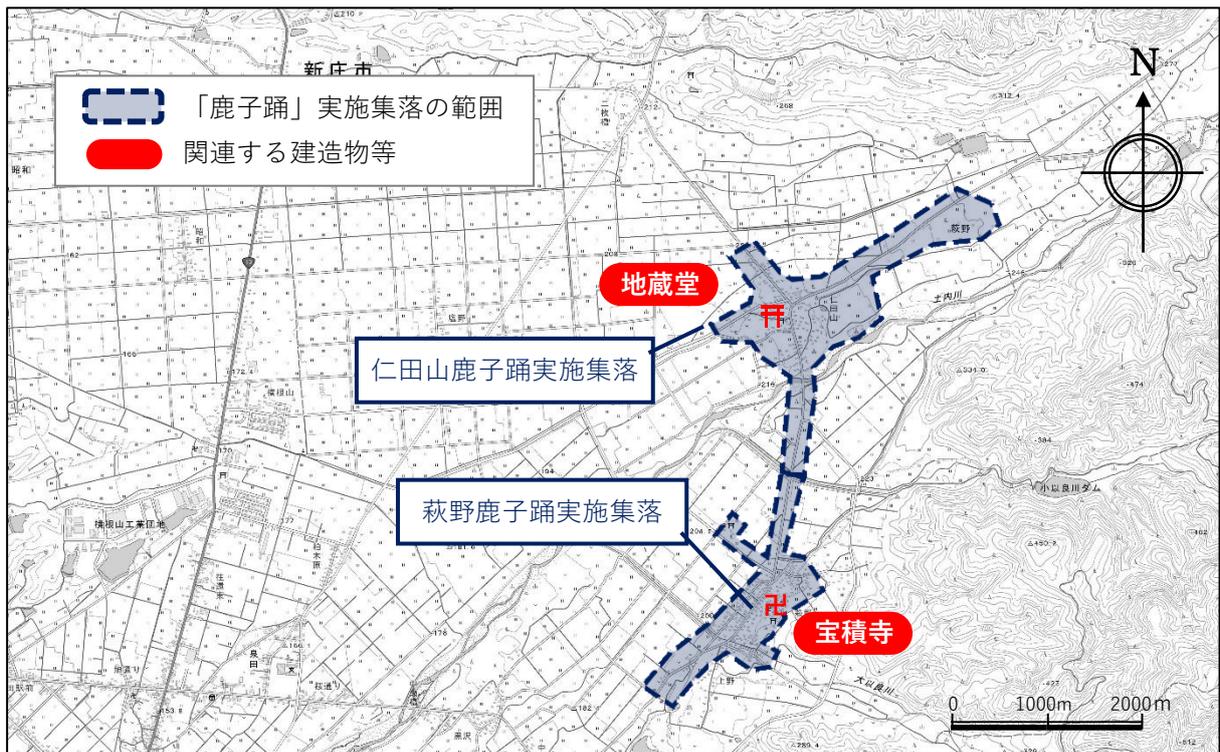
新庄まつり／駅前広場(昭和51年)



仁田山地蔵尊の祭日(平成19年)



新庄まつり／南本町(平成27年)

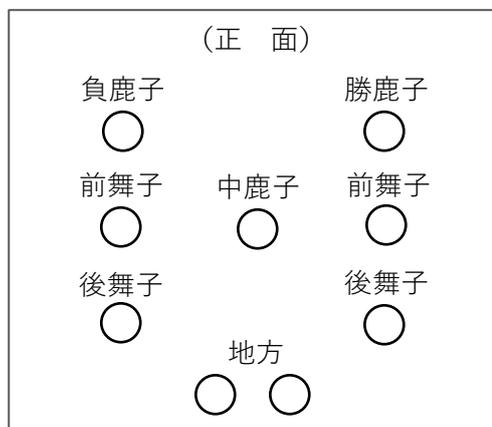


萩野・仁田山鹿子踊の実施集落の範囲

◆踊りの構成

萩野・仁田山両集落は、元来ひとつの村とみられていたようで、藩政時代は萩野村の名で一括されていた（仁田山は萩野村の枝郷）。両集落の鹿子踊も、衣装や踊りの細かい点に相違はあるが、基本的には全く同じ系統に属する鹿子踊である。

踊りは、1人が1頭のカモシカに扮する一人立ちの鹿子踊で、7人1組となって踊る。これに地方と呼ばれる2人の謡手がつく。7人はそれぞれ頭をかぶり、膝下まで達する長幕を垂れ、胸に羯鼓（太鼓）を抱き、これを両手で強く叩きながら勇壮に踊る。踊りをリードするのは中鹿子で、これに勝鹿子・負鹿子・前舞子（2人）・後舞子（2人）が従う。



鹿子踊の配置図

中・勝・負鹿子の3人は、背中に「萩野村」・「大良川」・「小良川」（以上、萩野）、「仁田山」・「小倉山」・「峯の紅葉」（以上、仁田山）、「五日風」・「十日雨」（以上、共通）と染め抜かれた小幟を挿して踊る。「五日風」・「十日雨」の小幟は、「稲作りの季節、五日ごとに風が吹き、十日ごとに雨が降れば豊作になる」という諺に基づくものといわれている。ほかの4人の舞子は、背中にボンボリ（5色の布を垂れた棒）を挿して踊る。

7人の後に2人の地方が立つが、2人はともに布を垂れた饅頭壺をかぶり、黒襟の単衣に角帯をしめた着流し姿、草履ばきで、両手に太い割り竹の「ササラ」を持ち、これを摺りながら御詠歌調の歌を歌う。



カモシカを模した頭



羯鼓（太鼓）



地方



ササラ



小幟

◆踊りの曲目

鹿子踊は、7人の鹿子が踊りの庭（場所）に入るところから始まる。領主の館で踊る際に、踊りの庭に入るにはそこに通ずる橋を渡らなければならず、長木や縄などを置いて橋に見たてる。庭に入るまでの一連の踊りを「入羽^{いりは}」あるいは「庭入り」と呼び、このとき地方が歌う歌詞は、

〱花の盛りに鶯が舞に上る 千代と囀る 千代と囀る

〱日和よしに 目出度き庭に踊り来て 五穀豊穰 鹿子が遊ぶよ 庭の見事よ 庭の見事よ
の二つである。

次に、「館^{やかた}参り」の踊りに入る。このときの歌詞は

〱秋草は 御簾吹き上げて よろずの宝 見せろ秋風 見せろ秋風

である。この歌詞は、村内の民家や新庄の町家で踊る場合の歌詞で、昔は藩主の別邸で踊ったというが、このときの歌は、

〱畏れながら 御国の御殿を拝むれば 九重上の十重の白壁

〱畏れながら 奥の御殿を眺むれば 千代は万宝 奥に重なる 奥に重なる

などであったという。

次に、鹿子踊のクライマックスともいうべき「もみ太鼓」（「狂い」ともいう。）の踊りに入る。これは、牝鹿子（中鹿子）をめぐって、勝鹿子・負鹿子が激しく争う場面の踊りで、最もテンポの速い勇壮活発な踊りであり、「ササラ」の音も太鼓のリズムも一段と大きく、激しくなる。このときの歌は、

〱小倉山 峰の紅葉ふみ分けて 谷の牝鹿子に 逢うぞ嬉しき 逢うぞ嬉しき

〱荒がねはてんでに鍛え 刃をつけて 思う牝鹿子 逢いに來たさよ 逢いに來たさよ

の二つである。

次に、「投げ草」の踊りに入る。この踊りは、家の主から纏頭^{はな}（御祝儀）をもらい、一同がこれに感謝する踊りである。このときの歌は、

〱はなの投げ草 幕ふり上げて 見よや投げ草 投げ草を見よ

である。

最後に「引き庭」の踊りとなる。このときの歌は、

〱有難やこの家のやかたの福の神 戴きながら 宿の土産に 宿の土産に

〱これほどの花の庭を ふり捨てて 宿に帰る 名残惜しさよ 名残惜しさよ

の二つである。「これほどの」の歌が終わると、一同は前に出て横一列となり、向きを変えて、勝鹿子を先頭に踊りながら退場する。最後尾は中鹿子である。

こうして一連の踊りは終わるが、この所要時間は約40分である。なお、この間に歌われる歌の節はひとつとして同じものはなく、状況によって少しずつ異なる（上記の歌詞は『新庄市史（別巻民俗編）』より引用）。

◆踊りの伝承

鹿子踊は、それぞれ萩野鹿子踊保存会と仁田山鹿子踊保存会によって伝承され、令和4年度(2022)現在、萩野12名、仁田山15名が活動している。

この鹿子踊を一人前に踊れるようになるには、4年から5年を要するといわれている。踊りや歌の節、「ササラ」の摺り方は書き留めたものがなく、全て先輩からの口伝で伝承されている。踊りを習得する際は、最初に舞子の踊りから練習し、これが熟達すれば、次に勝・負・中の鹿子の踊りを練習する。この三鹿子の踊りが最も動きが激しく、所作も複雑であるので、なかなか難しいといわれている。また、地方は、踊りとは別に歌と「ササラ」の摺り方を練習するが、多くの場合、踊りを退いた長老が務める。



萩野学園での授業風景

萩野地区にある萩野学園(義務教育学校)では、地域の伝統芸能を学ぶ授業の一環で、毎年鹿子踊の特別授業が行われ、保存会の方々による指導と伝承が行われている。

3) 山の神の勸進

①山の神信仰

山の神は、各家の神棚に祀られているが、このほか、日頃薪や山菜、茸などを採る山の登り口に石碑や小祠の形で祀られている。山の神に対する信仰は地区によって濃淡があり、新庄市街地に比べて萩野地区など山寄りの地区の信仰は厚く、これは、日常の生活がいかに山に恵みに依存しているかの、その程度の差によるものと思われる。また、山の神は、秋冬は山にいて山を守るが、春になると里に下って田畑の作物を守る「田の神」になるとされており、この地区の農耕文化とも深く関わっている。なお、山の神信仰は、マタギがいる地域や炭鉱があった地域など、場所によって捉え方が異なるが、この地区では農耕文化との関わりが深いのが特徴である。

山の神の祭りは、季節ごとに大小合わせて年5回程度行われる(集落によって異なる)が、大きな祭りとしてされているのが「山の神の勸進」である。山の神の勸進は、「山の神の年越しの日」とされる12月12日ころに行う集落と、「山の神が田の神になる日」とされる4月3日ころに行う集落の大きく2つに分かれる。

②建造物

◆山の神神社

山の神の勸進を実施している7集落のうち、小月野・月岡は神社がなく、ほかの5集落には山の神神社、または山神神社と言われる社が存在する。社殿は、神明造りや春日造りなどの寺院や神社型式の荘厳な建造物ではなく、切り妻の屋根を持ったごく簡素なお堂に似た建物である。ほとんど鍵がかけられておらず、いつでもだれでもが自由に参拝でき、目の前で御神像に接することが可能であることが大きな特徴で、庶民に解放された身近な神であることがうかがえる。古くから地域住民の手で繰り返し修理・改修を行いながら維持している。

山の神神社は、宝暦年間(1751~64年)に編さんされた『新庄領村鑑』の萩野村の堂社の

一覧に次のとおり列記されており、その年代から仁田山、萩野（本郷）、黒沢、吉沢集落に山の神神社があったことが分かっている。

- 山神 仁田山 {タ (縦) 九六半 ヨ (横) 十五}
- 本郷 {タ (縦) 十 ヨ (横) 九}
- 黒沢 {タ (縦) 十五 ヨ (横) 十四}
- 吉沢 {タ (縦) 〇半 ヨ (横) 九}



山の神の勧進の実施集落と神社の位置

(4) 萩野地区の信仰行事に見る歴史的風致

【萩野集落の山の神神社】

萩野集落にある山の神神社は、前述した山の神神社の特徴とは若干異なり、流れ造り風の立派な建物で、柱には木鼻きばななどの装飾も施されている。神社の中には、大正 11 年（1922）に社殿を修繕したことを記録した板額があり、89 名の寄付者と寄付額が記されている。

神社の中央奥には立派なほこら祠があり、いわゆる御神体として安置されている御神像と勧進の際に子供たちが持って歩く御神像の 2 体がある。また、そのほかにも 5 体の小さな御神像が無造作に置かれてあり、これらは自然木にやや手を加えた程度のものである。



山の神神社（萩野）



柱の装飾（木鼻）

大正 11 年（1922）の
社殿修繕を記録した板額勧進の際に一番大將が
持って歩く御神像

【黒沢集落の山の神神社】

黒沢集落の山の神神社の拝殿正面には、「黒沢山神社調書」と題される額が掲げられており、それによると、建立は「大同年間（806～810 年）の創立なれど年月日不詳」と記されている。また、祭神は大山おおやまつみのかみ祇神であるとされ、勧進の始まりを文政 10 年（1827）としているが、その根拠は定かではなく、その時点での伝承と捉える必要がある。

現在の神社が建立された年代は明らかではないが、神社内に昭和 35 年（1960）8 月に参道を改修した際の寄付者を記す板額があり、集落の人に当時の話をうかがったところ、「鳥居から神社の階段までの舗装を行った。」ということであった。



山の神神社（黒沢）



昭和 35 年に整備された参道

昭和 35 年の参道整備の
寄付者を記した板額

各集落の山の神神社の建築年代については、下記のとおりである。

集落	建築年代	根拠資料等
赤坂 山神社	昭和 56 年 (1981)	・昭和 56 年 (1981)、台風による倒木で神社が倒壊し、その年の 8 月に再建した。(『最上地方の山の神の勸進』平成 26 年 3 月山形県教育委員会刊)
黒沢 山の神神社	昭和 35 年 (1960) 以前	・神社内に、昭和 35 年に参道を整備した際の寄付者を記す板額が残されている。
吉沢 山の神神社	不明	
仁田山 山の神神社	不明	
萩野 山の神神社	大正 11 年 (1922)	・神社内に、大正 11 年に社殿を修繕した際の寄付者を記す板額が残されている。

③活動

◆山の神の勸進

市内で現在も「山の神の勸進」を行っている集落は、黒沢・吉沢・萩野・仁田山・赤坂・小月野・月岡の 7 集落である。

山の神の勸進の起源や歴史については、徴すべき史料が見当たらず、確かなことは分かっていないが、黒沢集落の山の神の御神像のひとつに、「万延二年 (1861) 西 二月吉日」の墨書銘があることから、遅くとも藩政時代までは遡り得ると考えられる。文献としては、『日本民俗学』第 84 号 (昭和 47 年 11 月刊) 及び『山形県最上地方における「山の神の勸進行事」と「サンゲサンゲ行事」について』において、昭和 45・46 年 (1970・1971) に仁田山集落の山の神の勸進を調査した結果が掲載されている。

なお、「最上地方の山の神の勸進」は、平成 18 年 (2006) 3 月に国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択された。

◆黒沢集落の行事の内容

行事の詳細は集落によって異なる部分もあるが、大まかには同じである。ここでは、実施集落を代表して黒沢集落の一連の行事内容を記載する。

黒沢集落の山の神の勸進は、かつては 12 月 11 日から 12 日の 2 日間に渡り行われたが、現在は、12 月 12 日に近い土曜日と日曜日に行われている。12 月 12 日は、山の神が年を越す日で、「山の神のお年越し」と呼ばれている。黒沢集落の山の神の勸進は、それを祝う行事として位置づけられている。

行事に参加するのは、原則として 8 歳から 15 歳までの男子である。子供たちの最年長者が「一番大将」に選ばれ、祭りを主宰する。以下、「二番大将」・「三番大将」を選び、一番大将の手助けをする。男子のみが参加する理由は、「山の神が女性だから」とされている。これは現在でも意識されており、行事での子供の面倒は父親の役割とされ、母親の関与は最低限に留まっている。

【前日のおさいど】

山の神の勸進の前夜、山の神神社の傍の田で「山の神のおさいど（火まつり）」が行われる。勸進に参加する子供は、その日の朝から藁や豆殻の束を家々から集めて回り、河原よりきり出した柳の太枝の周りに積み上げて、おさいどの準備を行う。夕暮れが近づくと、神社には参拝者が訪れるようになり、三番大将以上の男子は参拝に来た人を接待する。参拝者の多くは、灯明と賽銭を上げるほか持参した白い重ね餅を納めて帰る。この夜の賽銭は子供たちの小遣いとなり、餅は雑煮などにされて翌日の昼食にあてられる。午後7時ころにおさいどが始められると、子供たちはおさいどの周りで火の番をしながら過ごし、この日の行事を終える。かつては、三番大将以上の男子は、おさいどを終えてから翌朝までの間公民館に泊まり、仲間たちと過ごしていたという。



おさいどの準備風景

【勸進の当日】

当日の朝、神社に集まった子供たちは、神社の前で「山の神の勸進、米だら（なら）一升、餅だら十二、銭だら七八文、祈って給れや亭主殿、この家の身上登るように登るように、銭やら金やら貯まるように貯まるように。」と10回唱える。それが終わると、神社から御神像ごしんぞうを持ち出した子供たちは、最初に集落の北の端に向かって家々を訪ね、その後、南端、東端の方向で勸進を募りながら集落を巡り、最後は北端の神社に戻る。子供たちは、この1年に不幸のあった家を除き、午後2時ころまでに集落の全戸を訪ねる。御神像は2体あって、勸進のとき、それらを持つのは一番大将の役割とされている。子供たちは、それぞれの家の玄関で前述した「山の神の勸進、米だら（なら）一升、…」の口上を3回唱え、家人は玄関で御神像に礼拝し、子供たちへの労いの言葉とともに米や餅、金銭を子供たちに渡す。



神社で口上を唱える子供たち



集落内を勸進する子供たち

昼食休憩を挟んで勸進を終えた子供たちは、御神像を神社に戻し、その後は公民館で夕方まで自由に過ごし、最後はみんなで食事をして、勸進で集まった金銭を分けてから解散となる。金銭の分配は一番大将が行い、一番大将の取り分が最も多く、学年が下がるにつれてその額は小さくなる。かつては、この行事で一番大将を務めた男子は、ほどなくして集落の「若連」に入ったといい、子供から若者となり、そのような共同体に参画するうえでの通過点としての役割も果たしていたと考えられる。



各戸の玄関で御神像を迎える

【御神像】

前述した「黒沢山神社調書」と題される額には、同社の御神像について「一 木造一体 彫師不詳」と記されている。同社には2体の御神像があり、このどちらか1体が本来の御神像であると考えられている。御神像の1体は、女神の立像とみられ、1尺あまりの丈である。もう一方は、前者と同じ大きさの立像であるが、その造りは素朴であり、顔の造形もみられないことから、前者が本来の御神像ではないかとみられる。昭和の初期には子供の数も多く、勧進は2組に分かれて行われていたということから、後者の御神像は、そのような事情を受けて新たに作られたものであると考えられる。また同社には、この御神像のほかに、奉納された60数体の御神像群がみられる。山の神の「家来のよう」とされる御神像群は、5寸から1尺程度の大きさで、勧進の際には、一番大将以外の子供たちが2体ずつ持つこととなっている。



真綿を被った御神像



御神像群を両手に持つ子供たち

◆山の神の勧進の実施集落の概要

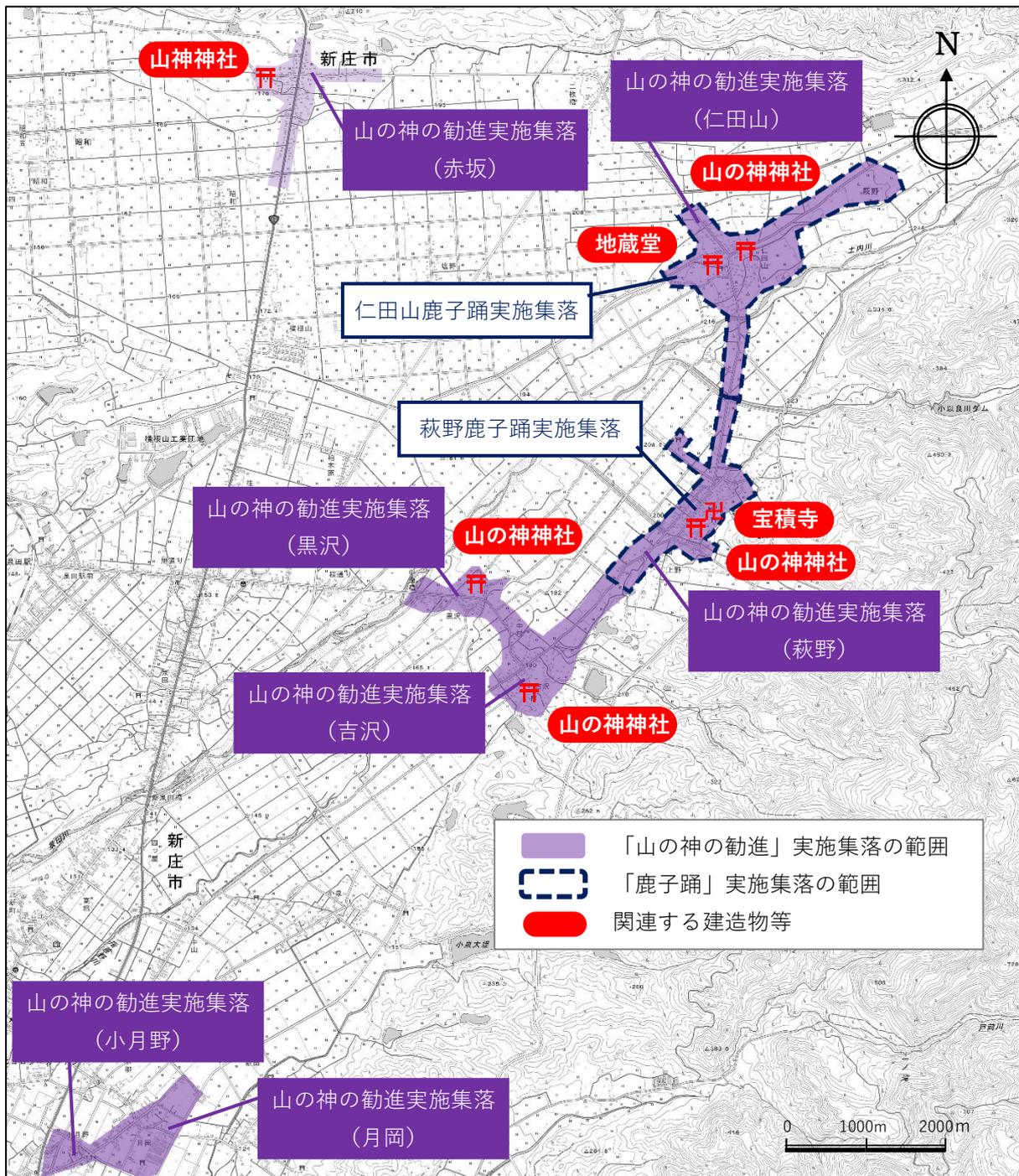
	集落	神社等	行事日	特徴
①	赤坂	山神社	12月29日・30日	・御神像は人型のものと棒状のもの2種類 ・御神像の数は300以上
②	黒沢	山の神神社	12月12日に近い週末	・御神像は着物を着て真綿を被っている。 ・勧進の前日におさいどが行われる。
③	吉沢	山の神神社	12月8日・9日	・近年、山の神の御神像を公民館に遷し、住民が参拝する形に変更 ・御神像は人型のものと男根型のもの2種類
④	仁田山	山の神神社	4月3日	・御神像は真綿を被っている。
⑤	萩野	山の神神社	12月8日に近い週末	・御神像は着物を着ている。
⑥	小月野	なし (公民館)	4月3日	・月岡分校倒壊(昭和24年)までは、月岡・小月野合同で実施 ・「山の神保存会」結成(平成12年以前) ・銘のある御神像でもっとも古いものは大正12年(1923)3月31日のもの。
⑦	月岡	なし (公民館)	4月3日	・月岡分校倒壊(昭和24年)までは、月岡・小月野合同で実施 ・御神像にシトギ餅(米の粉を水で練って作る団子)を食べさせる作法を行う風習がある。

4) まとめ

萩野地区では、歴史ある萩野・仁田山鹿子踊が伝承され、鹿子踊が披露される村の夏祭りには多くの人々が集まる。さらに、新庄まつりの際には、新庄城址や市街地でも鹿子踊が披露され、市内外から多くの人が見物に訪れている。

また、農村文化に根付いたさまざまな信仰行事のうち、山の神信仰に基づく「山の神の勧進」が今もなお行われている。それぞれの集落で小中学生が主体となって行事が行われ、地域コミュニティの一員として役割りを果たし、幼少期から郷土愛を育む機会が創出されている。

このように、歴史と伝統を背景として行われる人々の活動により、地域固有の良好な市街地環境が形成され、残していきたい歴史的風致となっている。



萩野地区の信仰行事に見る歴史的風致の範囲

【コラム】旧矢作家住宅と民話語り

○旧矢作家住宅

萩野地区の泉田桜通りにある旧矢作家住宅は、主屋（母屋）から「まや（馬屋）」が突き出している最上地方の典型的な「まや中門（片中門）造り」の住宅で、江戸中期の農家住宅の構造がみられる貴重な建物として昭和44年（1969）に重要文化財（建造物）に指定されている。



住宅の建立年代は明らかではないが、建物の規模から一般農家とみられ、構造手法などから建築は18世紀中ごろと推測される。19世紀の初めごろに中門部分の建て替え、明治中期と大正初期に改造増築が加えられたが、文化財の指定にあたり、古い形に復元された。

昭和52年（1977）に現在の場所に移築されたが、それ以前は旧萩野村の本村集落にあり、昭和49年（1974）までは実際に住宅として使われていた。萩野集落は、かつて3度の大火に見舞われたが、この家だけは火から免れ「火伏せ（火災を防ぐ神仏の力）の家」といわれている。

現在は、住宅内部に約120点の民具を展示し、当時の農家の暮らしを再現する施設として一般に公開されている。

○民話語り・昔語り

「むがす、むがす、あったけど…」で始まる新庄の民話語り。新庄は、全国でも有数の民話の宝庫として知られている。古くから囲炉裏端で語り継がれてきたが、昭和30年ごろから当地方の昔話の研究が本格的に行われるようになった。

昭和61（1986）年4月、市内の53名によって「新庄民話の会」が結成され、地域の民話の調査研究、昔ばなしの本の編集、語り手の発掘、伝承と普及活動を行うとともに、旧矢作家住宅や新庄ふるさと歴史センターを会場に「みちのく民話まつり」を開催している。また、小中学生への伝承活動を行い、「こども語りまつり」も開催している。



旧矢作家住宅で行われる
「みちのく民話まつり」